

近世文学史覚書——文章篇

鈴木健一

一、俳文

俳文は、和文や漢文のような〈雅〉そのものではなく、滑稽さも含み込む〈俗〉に属する文章である。ただ、その一方で、風雅な一面も内包し、また漢文調も許容しており、卑俗なだけではない。俳文は、形式的にも『古文真宝』などに収められている中国の文章を規範とした。⁽¹⁾その歴史を辿ってみたい。

(一) 近世初期の俳文

近世初期、松永貞徳門下の立圃・貞室・季吟らにも俳文と見なせる作はある。そのうちの一つ、季吟著『山の井』（正保五年〈一六四八〉刊）から、「虫」の最後の部分を見てみたい。

「壁のくづれをつづりさせ」となく蟋蟀の音にわび、みのむしの、おや鬼をこひて、「ちちよ」とよぶをとぶらひ、おほぢのふぐりがばけかはりたる、いぼじりのかたちをとがむる心などつらね侍るべし。

こおろぎの声には、『古今集』歌（秋風にはころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く）雑体・在原棟梁、一〇二〇番）を、蓑虫の声には『枕草子』の文章（「虫は」の段、「みのむし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、〈中略〉ちちよ、ちちよとはかなげに鳴く」）をというふうにならぶに古典的な表現を用いている一方、かまきり（「いぼじり」は、かまきりの古名）には祖父の陰囊という卑俗なものを引き合いに出して、雅俗を自在に往き来し、軽妙に描いている。風雅と卑俗の混融、それによる滑稽さの創出という俳文の持つ本質的な要素がすでに初期から見られるのである。

芭蕉以前で最もすぐれた俳文は、山岡元隣著『宝蔵』（寛文十一年（一六七二）刊）であるとの評価が一般的である。さまざまな事物を随筆風に綴ったものである。

同書より、「筆」の特性や歴史について記していく箇所を挙げる。

しかあれども、そのかみは今の世の筆あらずして、文字にのこさまほしきわざあれば、竹をさきて簾やうの物にあみつらね、刃物してゑり付け侍るとぞ。猶此の事のたやすからざるをおもひて、秦の世に豪恬まうてんといへるなん、今の世の筆つくり出してより、ものかくわざたやすくなりけるとこそ。しかのみならず、王羲之・趙子昂がからめきたるはさらにもいはい。五筆の人を出で神にいたり、三筆の古風なる、御家のふくよかに、勅筆のけだかく、禅筆の世をはなれたる、これみな代々の重宝にして天が下の見ものたるをや。彼の埋木の人しれぬ思ひをつぐる人、「たれさままるる」「身より」などかきちらせるは、などそのはじめの心ならんや。

和漢の故事を引き、簡潔にかつ調子よく叙述し、最後の一文で恋文に用いられることなど想定しなかつたらうと筆

を擬人化して戯れ、滑稽味をかかせる。こういったところに、俳文の典型的な特質がよく表れており、この分野の確立を見て取ることができるだろう。

(二) 芭蕉の俳文

俳文を高みに押し上げたのは、許六が『本朝文選（風俗文選）』（宝永三年（一七〇六）刊）序で「先師芭蕉翁、始めて一格をたてて、気韻生動をあらはせり」と述べたように、芭蕉（一六四四〜九四）その人であった。『おくのほそ道』（元禄七年（一六九四）頃成立）から三例を引こう。

1 弥生も末の七日、明ぼの空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峰幽にみえて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。

2 抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡そ、洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。嶋々の数を尽くして、歛つものは天を指し、ふすものは波に匍匐はらばら。あるは二重にかさ

なり、三重に畳みて、左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。（中略）松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂・松笠など打ちけぶりたる草の庵、閑かに住みなし、いかなる人とはしられずながら、先づなつかしく立ち寄るほどに、月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ。江上に帰りて宿を求めれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝すること、あやしきまで、妙なる心地はせらるれ。

3 市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔・へちまのはえかかりて、鶏頭・ははきぎに戸ぼそをかくす。さては、此のうちにこそと門を叩けば、佻し気なる女の出でて、「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは、此のあたり何がしと云ふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へ」といふ。かれが妻なるべしとしらる。

1は、旅立ちの場面。『源氏物語』帚木巻、木下長嘯子の和文「山家記」、西行『山家集』などの表現を散りばめながら、優雅に記述する。歴史的な表現の厚みをもって記述されることで、旅立ちの高揚感、緊張感が表現されるのである。

2は、松島の場面。冒頭は、漢語や対句を用いながら、漢文調で松島の風景を描写する一方、（中略）の後、隠者への親近感を表出する箇所は一転して和文調になる。そのように漢文調と和文調を織り交ぜていくことで、文章に変化をもたらしている。

3は、福井の場面。あたかも『源氏物語』夕顔巻に登場する謎めいた女かと思いきや、旧知の俳人等裁のわびしげな女房が現れたという落差を笑いに転じさせる、滑稽さを帯びた文章である。ここでは引用していないが、場面の最後で等裁が「裾おかしうからげて」道案内をしてくれるのも、風流人ならではのおかしみが表れていて、決まっている。

1〜3によっても、『おくのほそ道』が全体として風雅と卑俗を高次元で統一していると考えられるだろう。

『おくのほそ道』では他にも、那須野における親切な農夫と可憐な少女、黒羽における見物の日々、平泉での懐古の情、山刀伐峠での不安感、立石寺における蟬の声への没入、市振における遊女との触れ合い、山中温泉での曾良の離脱など、読みどころを挙げていけばきりが無いが、ここでは割愛する。

名文として知られる「幻住庵記」（元禄三年成立）にも触れておきたい。

庵の所在、由来、それへの愛着、周辺の光景、日々の暮らしなどの描写がまずあることで風趣が盛り上げられる。私としては、後ろの峰に這い登って、松の枝を用いて棚を作り、円座を敷いて「猿の腰掛け」と名付ける箇所が、楽しい気分を感じられて特に好きだ。また、昼は農談に耳を傾けつつ、夜になると「罔面まうづら」—影の外側にある薄い影—

に精神を集中させるところも、のんびりしたところと緊張するところが共存していて、とてもいい。そして、それに続けて、

ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。

という、人生を振り返って、俳諧にしか己の生きる場所はなかったとする、慨嘆と自負が入り混じった現在の心境を吐露する文章が配置されることで、自己の感懐を読者に強く印象付ける。なお、「幻住庵記」における文章の構成も、中国の古文における叙事四段と議論一段から成る「記」のありかたに範を取っており、漢文の影響が色濃い。

『おくのほそ道』や「幻住庵記」に接すると、芭蕉の創意工夫によって俳文という分野が一つの到達点に達したことが知れる。

芭蕉門下による俳文の撰集としては、先に挙げた許六編の『本朝文選』と、『本朝文鑑』（享保三年（一七一八）刊）『和漢文操』（享保十二年刊）——いずれも支考編——がよく知られている。中でも代表的な許六の俳文は、「五老井記」が「幻住庵記」を意識したものである一方、

隠士が曰く、「汝宇治の物語をしらずや」。答へて曰く、「其の拾遺の瓢も咎なき隣人が一命をたてり。これ全く瓢の罪といはむ」。「かかる目出度きひさごに何の罪かあらん。かれ仏縁深きゆゑ、空也上人には携へられ、鉢たたきの祖師とはなりける」。「かのさざ波やかただの海士が海老すくひも仏縁の内か」とぞいひける。

隠士大きに打ち腹立ちて、「汝がいひ分、皆々理屈の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の楽は、身の後の金よりは勝したりといへり」。草刈が云はく、「其の楽といつば、上戸の情也。瓢のかたちをいはむ。腹便々と肥えふとりて、口のせまきは何ぞや」。「せまくて餅の入らざるは下戸のなげきなり」と大笑して、歌つて云は

く、「瀟浪の水すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鯰を押さゆべし」といひて、去つて共に物いはず。

〔『本朝文選』「瓢辞」〕

といったように、知識を列挙して自在に展開させる、機知的な性格が強いものも多い。芭蕉の俳文がどちらかと言うと風雅に傾斜していたのに比べて、許六のそれは卑俗さも多く盛り込まれ、そして滑稽味が強い。そのような傾向は『山の井』『宝感』にもあつたし、後述する『鶉衣』にも認められる。卑俗さも受け入れ、滑稽味が勝つた、機知的な展開というありかたがむしる俳文の主流なのだと言えるかもしれない。

（三） 也有・蕪村・一茶の俳文

十八世紀中頃から、写実性や口語性も高まっていた⁽²⁾。中でも、洒脱な世界を機知的に作り上げた也有（一七〇二～一八三）、幻想的な世界を描き出した蕪村（一七二六～一八三）、より現実在即した描写を行った一茶（一七六三～一八二七）らの俳文がよく知られている。

1 青によしならの帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はただ其の道の芸くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたたまれて公界にへつらふねぢけ心もなし。只木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは桐の箱の家をも求めず。ひさごが本の夕すずみ、昼ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、又来る夏を頼むとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠のあしにけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寝姿を、穴かしこ、人にかたる事なかれ。（鶉衣）

2いとあやしくて、めかれもせずまもりゐるに、ひろ野などの碍るものなきところをゆきかふさまにて、やがてかきけつごとく出でさりぬ。阿満はさまざまおとろしともおぼえず、はじめのごとく物縫ふて有りけるとぞ。あくる日かの家にとぶらひて、「いかにや、あるじの帰り給ふことのおそくて、よろづ心うくおぼさめ」など、とひなぐさめけるに、阿満いついつよりもかほばせうるはしく、のどやかにものうちかたり、よべかくかくのけいありしとつぐ。聞くさへえりさむくすりよりて、「あなあさまし、さばかりのふしぎ有るを、いかに家子どももおどろかし給はず、ひとりなどかたゆべき。にげなくも剛におはしけるよ」といへば、「いやとよ、つゆおそろしきとも覚えず侍りけり」とかたり聞こゆ。(新花摘)

3 聞のかたよりは、母のよき折からと声をはげまし、「仙六に朝飯もたうべずいなせし一茶の骨盗人よ。弟の腹の空しさ思ひしらずや」などと、あたりに人なきごとくののしるに、我が身一つのくるしき、今更すべき術もなく、首を畳にすりつけ、手すりつつ、重ねては慎むべきと、涙を流して前非悔ゆるに、父のいかりもやしづかになりき。生み、ころしみ、父の戒は皆我が身の幸にしあれば、なじか悪しぎまに請くべき。さるにても父のいかり給ふ声の細り、うたてありさまなれ。よべは父に長の別れと思ひてんに、今朝は父のせつかんにあふ事のうれしさは、盲亀のうき木にあへりしも是にいかで増るべき。(父の終焉日記)

1は、也有著『鶉衣』(前編天明七年(一七八七)刊)巻頭に配される「奈良团扇」の全文である。奈良团扇は風を生じさせる以外には能がなく、高級品の扇のように公の場でご機嫌を取るような曲がった心も持たないと、その庶民性を称賛する。高級品の扇が和歌的、雅びさを象徴するならば、奈良团扇は俳諧的、卑俗さを象徴する。そして、扇が地紙を剥ぎ取られてしまうのに比べれば、物置の片隅に置かれる奈良团扇はまだしもまだと慰めて、自分がいかに奈良团扇に気を許しているかを軽妙に語る。機知と洒脱な感じに溢れた文章になっているのである。

2は、蕪村著『新花摘』（安永六年（一七七七）成立、寛政九年（一七九七）刊）における、常陸の国の富豪中村兵左衛門についての話の最後の部分である。餅が減っていくなどの怪異があり、富家に取り憑いていた狐が出て行ってしまふという幻想的な出来事を記した後、妻のお満が意外にも平然としており、顔色がよくさえあったというふう²に写實的に描写する。いつもは怖がりなお満がこの時はどうして恐怖も感じず、顔色もよかったのか。中村家に住み付いて豪家として栄えさせてきたオサキ狐が去っていくことによって、家政を一手に切り盛りしていたお満の緊張と不安が解放されたからだという学説³があるが、それに加えて、そのようにこの家を繁栄させてくれた狐への親愛と感謝の気持ちがお満の心の奥底にそもそもあったからではなかったかという理由も提示しておきたい。

3は、一茶著『父の終焉日記』（享和元年（一八〇一）文化初め（一八〇四）成立）の一場面である。父の死が刻々と近づいている状況で、義理の母が一茶を激しく罵るさまをやはり写實的に描写する。また、父の怒りにあったことすら喜ばしいと感じるところからは、一茶の自意識の強さを割り引いても、父の死に臨んだ子が抱く臨場感が伝わってくる。

なお、同じ写実と言っても、2よりも3の方が口語性は勝つていよう。

右の1〜3の中では、1が『山の井』『宝蔵』から続く系譜—機知的、風雅と卑俗の共存、滑稽味⁴の存在—を最もよく体現し、いわゆる俳文としての典型的な特質を表している。2・3は、置かれていた時代性以上に、作者の個性がより強く出ているものと言ってよい。

（四）近代へ

近世を通して、写実性や口語性を増していった俳文は、やがて近代に到って、写生文へと移り変わっていく。

また、近代になっても俳文は制作された。その掉尾を飾る一大俳文集は、明治三十八年（一九〇五）に刊行された当麻小太郎（答郎）編集・発行の『明治俳文集』である。構成はほぼ『本朝文選』に倣い、作者は尾崎紅葉が最も多く、他にも当麻答郎・巖谷小波・近藤幽山・石井露月・正岡子規・大橋乙羽・大和田建樹らの作品を収める。⁽⁴⁾

二、狂文

狂文は、狂体の文であり、主として天明朝を中心として、四方赤良（大田南畝）ら狂歌師が制作し、多くの場合狂歌が添えられた、戯作的な文章を言う。風来山人（平賀源内）の影響を受け、また也有の俳文の機知的で洒脱なありかたにも学んで、洗練の度を加えていった。⁽⁵⁾

風来山人（一七二八〜七九）の狂文としてよく知られるものに「瘞陰隱逸伝」（明和五年（一七六八）刊）がある。その冒頭を引こう。

天に日月あれば人に両眼あり。地に松蕈あれば跨に彼の物あり。其の父を尻といひ、母を於奈良といふ。鳴るは陽にして臭きは陰なり。陰陽相激し無中に有を生じて此の物を産む。因つて字を尻子といふ。稚きを指似といひ、又珍宝と呼ぶ。形備はりて其の名を魔羅と呼び、号を天礼菟久と称し、また作蔵と異名す。万葉集に角の布具礼と詠めるも、疑ふらくは此の物ならん歟。漢にては勢といひ、また尿といひ、屙といひ陰莖といひ玉莖といひ、肉具と呼び、中霊と命け、俗話にては雞巴といひ、紅毛にては呂留といふ。男たる人ごとに此の物のあらざるはなし。其の形状大なるあり、小なるあり、長きあり短きあり。或は円く或は扁。又は豊下・頭がち、白勢あれば黒陰莖あり、木魔羅あれば麴筋勢あり、疝癩まられば半皮あり。空穗あればすげけあり。亀陵高あれば越前あ

り。上反あれば下反あり。其のさま同じからざることは人の面の異なるが如くなれば、一々にいひ尽くすべうもあらず。

前半は、陰莖の呼称を次々と列挙していく。後半は形状について、そのさまさまをやはりこれでもかと列挙していく。その量の多さによって、文章に勢いも付くし、卑猥な題材を大真面目に論じること、かえって落差が生じ笑いも醸し出される。

事物を機知的に描写していくところは、俳文—『山の井』『宝蔵』、『本朝文選』、そして也有の『鞆衣』—にも見られることであった。この風来山人の文章の性質もそれと通底するものがあるが、あえて違いを見出すならば、後者の方が文章により勢いがあり、また「痿陰隱逸伝」の場合には性的な題材を扱うことで卑俗さが増幅されている。俳文と狂文の違いについてはさらに後述する。

天明期に到って、狂文の質をさらに高めたのは、四方赤良（一七四九—一八二三）であった。その狂文集『四方のあか』（天明七年頃刊）から、三例を指摘してみたい。

1 四方赤良左に盃をあげ、右にてんぷらを杖つきて、以てさしまねいて曰く、来れわが同盟の通人、汝の耳をかつぼぢり、汝の舌をつん出し、つつしんでわが御託をきけ。いにしへ天地いまだわかれざる時、混沌としてふはふはの如し。その清るは上りて諸白となり、濁るは下りて中汲となる。「酒はこれきちがひ水」と、天竺の古先生が一国な事いつても、また百葉の長歎半歎と、きれかはつたる飛目あり。「鄭声は淫なり」と、宇宙第一の文にかきなんしても、「とかく浮世はつってんてん」とは、由良殿の金言なり。（から誓文）

2 そもそもこの山、孝霊のむかし生まれ出でしより、若白髪のの雪つもりつもりて、千歳の末はも欠けず崩れず、廿一代の千言万句も、赤人の田子の浦にうちけされ、五山の僧の抹香くさき詩も、丈山が白扇にあふぎ伏せられぬ。

されど泰山は塵土を譲らず、河海は化粧水をいとはず、富士のしら雪朝日でとけてと唄へば、三国一の甘酒の看板にも、をしげなく書きちらすは、また勿体なき事ならずや。むかしより此の山を賞でし人幾許ぞや。在五はまたらに、雪舟はしろし。その中にまつ黒々の墨衣、西行といへばふじを思ひ、ふじといへば西行と氣のつくは、此の山此の人古今一對なるべし。嗚呼さくや姫また出づるとも、わが言をかへじかし。

生国駿河者 本国近江湖

三国一山外 出鄭出店無

うかがへばふじほどくろきものはなし管もて天をたつた一日（富士山絵賛）

3 その世にあるや、親につかへ妹をめぐみ、その芸にあそぶや、詩をならべ戯歌を嗜む。その志をたつるや、商人の美衣着ん事を恥ぢ、その家を治むるや、小鮮を烹るがごとし。我かつて自ら過てり。汝まのあたり諫めて蔵さず。我かつて人に誹らる。汝悔りを禦ぎて容れず。たとへば孔子の子路を得て、さがごと耳に入らざるがごとし。今や時うつり事さりて、春もまた半ばを過ぎぬ。これに告げんとすれば、其の人花に先だちて散り、これに見へんとすれば、其の影鳥の翔るがごとし。（辺越方人をいためることば）

1 は、安永三年（一七七四）の作である。いかにも江戸っ子が啖呵を切るといった風情で、文章に力強さがある。「いにしへ天地いまだわかれざる時」以下、『日本書紀』神代卷上の表現を骨格としつつ、「ふはふは（酒の肴）」「諸白」「中汲（濁酒）」といった酒と肴に関わることばを連ね、雅と俗を混ぜ合わせながら、勢いよく筆を進める。「鄭声は淫なり」は『論語』、「とかく浮世はつってんてん」は『仮名手本忠臣蔵』と基づくものが大きく異なり、ここも雅俗が対比される。また、「百薬の長敷半敷」と掛詞によって内容を展開させていくところも切れ味が鋭い。

2 は、富士山に関わる知識を列挙しつつ、機知的に述べる。『万葉集』の山部赤人の歌や、石川丈山の漢詩といっ

た雅な表現を引き合いに出す一方、「富士の白雪、朝日ととけて、三島女郎衆の化粧水」という俗謡や、甘酒屋の「三国一」という看板など卑俗な内容も盛り込み、雅俗の融合が調子よく記される。

3は、天明七年（一七八七）の作である。こちらでも調子はよいが、たとえば1のような勇ましさはなく、むしろ優美さが前面に出ている。1から3へは十三年が経っており、安永から天明にかけて狂文も成熟していき、初期の激しさが薄れていったとも言えるし、南敵自身も1ではまだ二十六歳だが2では三十九歳になっており、1の方が若さが反映したものになっているとも言える。また、3は追悼文であるためやや押さえ気味になっているのかもしれない。先にも少し触れたが、俳文と狂文の違いは何であろうか。

芭蕉の俳文は、風雅に重きを置き、狂文との違いは鮮明だが、狂文が直接影響を受けた也有の俳文は、機知的で洒脱という点で狂文と近いものがある。そういう意味では、担い手が俳人か狂歌師か、末尾に発句があるか狂歌があるか、といった分野意識や形式によって区別することはできても、内容的に明確な違いを指摘するのは難しいだろう。あえて言えば、狂文の方が、風雅がやや薄まり、文章の展開がより鋭利で勢いがあるとおきたい。

三、自伝・回顧録

以上の和文・漢文・俳文・狂文といった分類とはやや次元が異なるが、特に注目したい文章について、以下、自伝・回顧録、紀行文、記録文、考証随筆、地誌などに分けて記していくことにする。

ここでは、自伝・回顧録として、二つの著述を取り上げる。いずれも近世文学の作品として十分に読み応えのあるものである。

まず第一に、新井白石著『折たく柴の記』（享保元年（一七一六）起筆）は、序文によれば、自分が仕えた六代将軍家宣の政治的な業績を明らかにし、また白石を含めた祖先の事跡を子孫に伝えようとしたものである。多くの写本が伝えられ、広く読まれた。特に面白いのは、幼少期の思い出に関する部分である。

たとえば、上総国久留里藩主土屋利直に仕えた父が語った、次のような有名な逸話がある。蘆澤という、生まれつき大胆で物を恐れないが、愚かな振る舞いも多い若者が藩中にいた。ある時、蘆澤は不始末を仕出かし、土屋侯は怒りのあまり手打ちにしようとして父を召し出す。ついてくるよう命じられた父は返答をしない。何を思っているか、土屋侯から問われて、父は蘆澤の忠心、欠点、将来性などを語った後、土屋侯も父も押し黙ってしまった。この後の描写がすごい。

またのたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくしてさぶらふほどに、ややありて、「面に蚊の聚りぬるぞ。逐ふべし」とのたまひしほどに、顔を動かさなければ、血に飽きて、胡頹子のごとくになりし蚊の、六つ七つはらはらと地に墜ちしを、懐の紙をとり出だして、つつみて袖にしてさぶらふ。

父の顔には蚊が群がって血を吸っていたが、気付かなかった。土屋侯に言われて、ようやく顔を動かし、満腹になった蚊が六七匹はらはらと落ちて行った。蘆澤を救うべく主君へ物申した緊張のために、それほどまでに父は凝固していたのである。土屋侯は、蘆澤を成敗するのは断念した。

白石としては、父の思い出話を書き留めたに過ぎないのかもしれないが、第三者にとっての読み物として十分堪える面白さを備えている。

『折たく柴の記』では、白石が眠くなると水を浴びて猛勉強する場面も印象的のだが、紙数の関係上、省略する。さて、もう一つは、杉田玄白著『蘭学事始』（文化十二年（一八一五）成立）である。小塚原の刑場での腑分けを

見学した前野良沢や杉田玄白は、『ターヘルアナトミア』の解剖図がいかに正確かを知って感歎し、中国医学ではなくオランダ医学を学ばねばと考へ、なんとか同書を翻訳したいと切実に願う。

ただそれには、オランダ語を理解するという大きな関門が彼らの前に立ちはだかっていた。そこで、年長者で、長崎へも行きオランダ語を少しは知っていた良沢を中心に、勉強会が開かれることになる。未知の外国語に対して、一つ一つ問題を処理していく過程は、それだけで一編の小説を読むようだ。彼らの情熱がひしひしと伝わってきて、自然と劇的さが高められていく。

玄白が当時を回顧して、あまり脚色せず、事実に即して正確に描写しようとするのが、かえって臨場感を高めてもいよう。写実性ゆえの現実感があるのである。

「フルヘツヘンド」の意味を解き明かす、有名な場面がある。ある日のこと、鼻の記述に「フルヘツヘンド、せし物なり」とあるが、誰にもわからない。良沢が長崎で求めた小冊子には、

木の枝を断ち去れば、其の迹フルヘツヘンド、を為し、又、庭を掃除すれば、其の塵土聚り、フルヘーヘンドす。とあることから、玄白は、

木の枝を断りたる跡愈れば堆くなり、又、掃除して塵土あつまれば、これもうづたかくなるなり。鼻は面中において、堆起せるものなれば、フルヘーヘンドは堆しといふ事なるべし。

という解釈をする。人々の賛同を得た玄白は、非常に嬉しかったと記している。そして読者も、玄白と一緒に学んでいくことの喜びを体験できる。

『折たく柴の記』や『蘭学事始』は、いわゆる小説のような架空の物語ではない。また、本章で取り上げた和文・漢文・俳文・狂文のような意匠を凝らした文章というわけではない。

ただ、きわめて知性の高い人々が、論理的な筋道を明確にして理知的な筆致を保ちつつ、自らに固有な体験を語っていくのである。そして、その客観性と主観性が入り混じった中に、高度な文学性が発揮されていると言えるだろう。

四、紀行文

近世以前の紀行文は、『土佐日記』をはじめとして、都を離れた不安感を抱えつつ、歌枕を探訪し、旅先の風景や人情に哀感を催すという趣が強かった。それは、旅が非日常だからである。

しかし近世に入ると、旅はより日常的な要素を強くする。交通網は整備され、参勤交代も行われ、商品の流通もさかんになる。伊勢参り、温泉での湯治など、旅する理由は枚挙に暇がない。そこで紀行文には、実用性―情報性―が期待され、自ずと表現は写实的―客観的で具体的―になる。⁶⁾

板坂耀子氏は、近世の紀行文の特色を「豊かな情報」「前向きな旅人像」「正確で明快な表現」だとし、代表作とされる『おくのほそ道』はむしろ中世までの伝統に則ったものであって近世的とは言い難く、貝原益軒著『木曾路記』(正徳三年刊)、橋南谿著『東遊記』(寛政七・九年刊)、同『西遊記』(寛政七・十年刊)、小津久足著『陸奥日記』(天保十一年成立)などをこそこの時代の紀行文の代表作とすべきだと指摘しており、これはほぼ今日の定説となっている。⁷⁾

(一) 前期

まずは、近世前期の貝原益軒(一六三〇〜一七一四)の紀行文を見ていこう。『壬申紀行』(元禄五年成立)では、

富士登山のさまが描かれる。

およそ高峯にのぼる人、吉原より行くには丑の時に宿りを出て其のあけの日ひねもすゆけば、其の日の暮つかたには、すなぶるひまでいたる。そこにて飯などくひ、やすみて、夜に入り、たいまつをともしてのぼる。すなぶるひより上は草木なく、ざれの上をふみてのぼる。道さかしければ、ゆきなやみて、はかゆかず。山上よりすこし下に暁がたにいたる。その石くらにしばらくねぶりのこひ、かれいるなどくひて、夜あけて山上にのぼる。雲ふかくして遠くみへざる事おほし。雲はれたる時、四方をうかがひのぞめば、世界に山はなくしてただ海のみ見ゆ。しぐれふり、いかづちなるも、山よりははるか下の方くもりとどろきて、山上には雷雨なし。

じつに行程がわかりやすく、現実的である。これから登ろうとする人には実際に役に立ち、過去に登った人にとっては記憶がまざまざと甦り、また登らない人にも実感を持って捉えられる。感傷に流されず、実用性と正確さに重きを置いた、近世らしい紀行文⁽⁸⁾と言えるだろう。

『東路記』（貞享二年（一六八五）成立）において、軽井沢あたりを旅した時には、次のように書き留めている。

凡そ、信濃は日本の内にて、尤地形高き所なりと云ふ。其の故は、海遠くして山上にある国也。四方の隣国より信濃に行くには、皆のぼる。甲斐、飛騨も地高く陰気ふかしといへども、信濃は猶まされり。故に、冬春は雪ふかく甚だ寒し。北国は信濃より雪ふかけれど、地ひきき故、信濃よりはあたたかなりと云ふ。

信濃は海から遠く標高が高いので、隣国から行く時は必ず登ることになる。北国の方が雪は深いが、標高が低いので信濃より暖かい。そういった科学的な事柄が、論理的に筋道立てて語られていく。これから信濃へ行く人にとって実用的な情報が記されているのである。

その一方、抒情的な記述も認められる。『口口紀行』（元禄二年成立）では、吉野の桜を見て、感懐を認めている。

此のさき見し時は、かさねて来ん事を期せずして、今又幸ひに命ながらへて此の時にあふこと、かねておもひの外也。いはんや、我が年すでにむそぢに及びぬれば、重来は必ず期せず。此のたびこそ、まことに此の花に永くわかるる成るべし。外物を以て心をうごかさざるは、物に処する道なれど、再び見ん事かたければ名残おしからずもあらず、久しくやすらひて去りがたし。

自分は六十歳に達したので、このすばらしい吉野の花盛りに再び来ることはかなうまいという感情が溢れ出ており、これはこれで味わいがある。「外物を以て心をうごかさざるは、物に処する道」とは、朱子学の説く道であると同時に、益軒自身が強調した信条でもあるが、そうは言ってもやはりこの吉野を見ると抑えがたい感動が心に湧き上がってくるというところに、深いあわれがある。

(二) 後期

寛政七十年に刊行された橋南谿（一七五三〜一八〇五）の著『西遊記』は、記された事物自体がおもしろく、また著者がそれに対して好奇心を注いでいるさまも十分うかがわれる。益軒に見られた実用性や写実性を保持しつつ、一編の話としての完成度が高まっている、と言えようか。逆に言うところ、紀行というより奇譚集といった趣も見て取れる。

たとえば「阿蘇山」では、活火山の様子がじつに生き生きと描写されている。

とく起き出でて、もゆる所に至る。大なる穴あり。是をみかどといふ。中のみかど、北のみかど、法性崎と名付く。都合三ヶ所也。当時さかんにもゆるは法性崎なり。たとへば、ふいごの口のごとし。黒煙、天を覆ひ、時々火出でて、其の音のおびたしき事、只今、此の山みぢんに砕くる心地す。其の勢ひは筆に書きつくすべくもあ

らず。しばし見居りたれど、我が身も山とともに碎けさるべき心地して、あくまでも見尽くしがたし。

三つの噴火口のうち最も激しく燃えているのは「法性崎」だとか、「黒煙、天を覆ひ」とか「其の音のおびたたしき」とか、表現が具体的なのである。実用性・写実性の高さをうかがい知るに十分であろう。

「仙人」でも、仙術を会得した人物への興味・関心を脚色過多にならず描写することによって、ある種の臨場感が生まれている。

山に入りて後も、今まで既に百何十年といふ上に成れり。されど行歩健やかにて、老いたるとも、若きとも知れず。彼の辺にては人皆、仙人なりと敬ひ、飛行自在、其の外種々の奇妙多しといへど、其の事は知らず。誠に霧嶋山は天下の名山にして、高き事、虚に聳へ、麓のめぐり三十六里、中に葉草、奇玉多く、大なる池數十、又、火燃ゆる谷あり。仙術修練の地是に過ぎたる所有るべからず。

仙人のありさまや、霧嶋山が不思議な空間であることなどが、淡々と語られることによって、読む者をもしかしたらそういうこともありうるのかという気持ちにさせる。さらにもう一点付け加えておきたいのは、そこにはのかなかしみが付与されていることである。「仙人」から別の個所を引こう。

ただ寒気には堪へがたかりしにや、冬に至れば里に出でて綿入を一ツ宛もらへり。春に成り暖氣を得れば、脱ぎ捨て裸体はだか成り。一年に一度づつ衣類の為に里に出でしが、近き頃に至りては仙術も追々に成就せしにや、衣類もなくて住みけり。

仙人も冬の寒さには勝てず里に出て衣服をもらうが、春になると脱いでしまし、修業が進むとそれも要らなくなるので里には来ない。なんだかちゃっかりしているような感じがして、読んでいておかしい。聞き知ったことを正確に描写しようとして、かえっておかしみが出るのは、著者の好奇心が十分に發揮されているからなのではないか。こ

こは少し笑ってしまえますねという口吻がなんとなく伝わってくる。

もう一例、『西遊記』から引くことにしたい。「絵踏」における、長崎の島原で掘り出された土人形についての記述である。

過ぎし年も、百性島を掘つて土人形式ツ掘り出だせしが、小児のよきもて遊びと思ひて島より取り帰り、棚に上げて置きしに、或時、彼の百性の留主に、彼の土人形棚の上にておのづから躍れり。小児見付けて、面白く覚へ、父の百性帰りて後しかじかと語りてほしがりければ、父大に驚きあやしみ、其の後心を付けて見るに、折々、彼の人形おのづから動きければ、大に恐れて、もしむかしの切死丹の者共杯が所持せし人形にやと、急にもとの島に埋めしとぞ。

ここでは、土中から掘り出した土人形が自然に動き出す、という怪異が記されている。島原という地から掘り出されたからこそ、もしかしたらそういうこともあるのかと思わされる説得力が付与されている。もっとも、本書が刊行された当時、島原の乱から百五十年以上が経っており、江戸の人々は、かなり過去の、そして遠くの地でのこととして、このような不思議な出来事を捉えていたろう。だからこそ、いっそう興味が掻き立てられ、またある種異空間の物語を読むような感覚に誘われたのかもしれない。

南谿とほぼ同時代を生き、蝦夷地に旅をした長崎奉行遠山景晋かげみちの紀行文も検討してみたい。現在の北海道を行く二例を掲げる。

『未曾有記』（寛政十一年成立）の、難所チコルシキ（現在の北海道日高支庁様似町、襟裳岬のやや西）を渡っていく記述を見よ。

一丈二丈の大岩六つ七つ争つ立ち、其の間を身をそばめて繞り行く。風声驕りて、打ちかくる波、腰を過ぎ、岩

に砕きて玉をなし、満面に灑ぎかけて、「雪の飛ぶか」とあやまたる。右は重巖疊嶂、天を隠し日を蔽ふ。洪濤激浪の為に山崖崩れ驚そこなひて、危岩怪石、磊砢として、足を履むべき寸地もなく、三里ばかりも連なりたる。此の石の上をわたり行く艱苦いふばかりなし。潮煙りに前後を忘じ、石皆鳴つて鏘然たり。あるは倒に垂る懸崖の、頭の上に落ちかかるかと跼せくまつて過ぎ、あるは石角の眼に硃する心地して、踏して去る。行くこと二里斗りして大岩二つあり。是をテレケウシといふ。一つは高さ三丈ほど。向ひの岩は二丈もや有るべき。二つの岩の頂上に、長さ四五尺の丸木一本わたりたり。

大きな岩の間を身をそばめて歩いて行きながら険しい崖と激しい波に挾撃されるありさまを、漢語を多用して、臨場感をもって描いていく。当時の人にとって蝦夷地を旅するだけでも稀有な体験なのに、ましてこのような難所を行うことなど本当に「未曾有」の出来事である。それをことばにして表現することで、いわゆる創作にはない生な体験が印象的に綴られていくことになる。

そして、その際にも技巧は凝らされている。波を雪に見立てるのは比較的常套的な表現だが、石の角によって踵に鍼を打つようだという比喩は斬新で、読む者に訴えかけてくるものがある。最後の、三丈（約九メートル）と二丈の大きな岩が聳え立ち、その頂に四五尺（約一・二―一・五メートル）の丸木が渡されているといった描写によっても、われわれはその光景をはっきりと想像することができるのである。まだ見ぬ蝦夷地の最果てに思いを馳せるための手段として、この紀行文はきわめて写実的で有効なのである。

『未曾有後記』（文化二年成立）の、かわしらすき（後部支庁神恵内村、現在の北海道積丹半島西側の日本海沿岸）を船で渡っていき鯨に出会う記述は、こうだ。

追ひ叱られて水中に沈みながら舟の右縁に、ひしとつく。梶取、「さしつたり」と舟を右へすすめば、鯨は左に

浮み出づ。間に髪を容れざるに其の背上に舟乗りかけざりしは高運なり。「万一誤りて背上に舟乗りかくなるときは、いかなる修練の舟師にても、逃ぐるに術なく覆溺すること也」とて、舟人、手に汗して避くるとか。

なるほど鯨の背中に船が乗り上げてしまうと、どんな熟練の漁師が漕いでも必ず転覆してしまうのか。そんな危険を賭していくありさまを写實的に描写することによって、読者も自分自身が体験した心持ちになり、興奮してしまう。さて、板坂氏も高く評価した小津久足の著した『陸奥日記』は、益軒の紀行文を模範としつつ、益軒ほど俗ではなく、雅俗折衷の趣があるという⁽⁹⁾。ただ、紙数の関係上、ここでは本文は掲げないことにする。

温泉紀行も紀行文の中で重要なので、一場面を挙げておきたい。原正興著『玉匣両温泉路記』（天保十年成立）から、熱海の間欠泉についての記述である。

見るうちに地鳴りひびき、「湯涌くよ」とて、ひとりふたりつどひて、柵によりて見るに、しばし地なりて、湯をりをり飛びちり、後には童子の手すさみにする水鉄炮と云ふものの如くにいで、其の後いよいよ勢ひ強くほとばしり、前の石垣に当たる。この時は大筒打ち出す如く見えながら、みとめがたく湯けぶり立ちかさなり、地ひびき益つよく、けぶり数十丈立ちのぼり、たとふるに物なし。もろこしの軍ぶみに、「百千の雷一どに落ちかかる如し」といふは、かくもあらんかし。しばらくして次第に音静かに、けぶり薄くなりて、涌きやむ。

地鳴りとともに間欠泉が勢いよく迸り、「水鉄炮」が「大筒」へ、そして「百千の雷」に変化していくさまが秩序立てて描写される。これもやはり実用性を備えた写実性なのである。

五、記録文

記録文というと漠然としていて、文学史の記述にふさわしいものがあるのかと感じられるかもしれない。ここでは、物語性を帯びた作品として、平田篤胤著の『仙境異聞』と『勝五郎再生記聞』（いずれも文政六年成立）を取り上げてみたい。

前者は、天狗に連れ去られた少年寅吉、後者は、死んで生まれ変わった勝五郎からの、それぞれ聞き取りで、ともに篤胤の幽界研究の一環として記述された。

文章の完成度はそれほど高くない。しかし、書かれている事柄が面白いため、読み物としても堪えうる。

特に、『仙境異聞』で、五十歳ほどの老翁があらゆるものを小壺に入れ、自らも入って飛び去る場面、

取り並べたる物ども、小つづら敷物まで、悉くかの小壺に納るるに、何の事もなく納まりたり。斯くてみづからも其の中に入らむとす。何として此の中に入らるべきと見居りたるに、片足を踏み入れたりと見ゆるに皆入りて、其の壺大空に飛び揚がりて、何処に行きしとも知れず。

や、『勝五郎再生記聞』での臨死体験、

其の時に白髪を長く打ち垂れて黒き衣服きもの着たる翁の、こなたへとて誘なはるるに従ひて、何処とも知らず段々に高き奇麗なる芝原に行きて遊びありけり。花の盛りなる所にあそびたる時、其の枝を折らむとするに、小さき鳥の出で来たりて、いたく威したる事のありしは、今も恐ろしくおぼゆ。

など、表現が具体的でかつ生き生きしている。

六、考証隨筆

考証隨筆とは、ことばの意味や日常生活での行事、社会風俗、また町の噂話などを大真面目に取り上げ、その由来や特質を考証するものである。近世も時代が進展し社会が成熟・頽廢した結果として湧き上がってきた、好事家的な知的探究心の成果と言えよう。

前中期にも契沖著『河社』、室鳩巢著『駿台雜話』（享保十七年成立）、荻生徂徠著『南留別志』（宝曆十二年へ一七六二）刊など著名なものがあつたが、本格的になるのは後期に入ってからで、大田南畝著『半日閑話』、同『一話一言』（安永四年頃）文政五年頃執筆、山東京伝著『近世奇跡考』（文化元年刊）、同『骨董集』（文化十一・十二年刊）、柳亭種彦著『還魂紙料』（文政九年刊）、同『用捨箱』（天保十二年刊）などがその代表と言える。大部なものでは、肥前松浦藩主松浦静山著『甲子夜話』（文政四年起稿）も著名である。

そこではたとえば、笠森稻荷の看板娘お仙の評判、豊臣秀吉辞世の和歌、龜山敵討の顛末、小野小町複数人説、豆腐の種類、吉原の名妓吉野の人生、服部南郭の詩評など、あらゆる対象が旺盛な知的好奇心によって自由自在に選び取られていく。

そして、そのような知性の躍動こそが、単なる事実の列挙ではない、一種の味わいを醸し出すこととなり、社会・文化の資料としてはもちろんだが、通しての読み物としても十分味わえる。森鷗外は『キタ・セクスアリス』の中で次のように書いている。

それから机の下に忍ばせたのは、貞丈雜記が十冊ばかりであつた。その頃の貸本屋の持つてゐた最も高尚なも

のは、こんな風な随筆類で、僕のやうに馬琴京伝の小説を卒業すると、随筆読になるより外ないのである。こんな物の中から何かしら見出しては、例の紺珠（引用者注・主人公の備忘録の表題）に書き留めるのである。『貞丈雑記』は、有職家伊勢貞丈が記して天保十四年に刊行されたものである。

七、地誌

近世には大量の地誌類が刊行されており、地理的説明にとどまるものが多いが、読み物として鑑賞に堪えるものもいくつかある。

江戸の地誌で最も代表的なのは、斎藤幸雄・幸孝・幸成（月岑）著『江戸名所図会』（天保五・七年刊）であろう。名所の配列が江戸城を中心に右廻りへとなされている点にある種の構成美が感じ取れる。さらに読み物としての性格を備えているのは、大浄敬順著『遊歴雑記』（文政十二年成立）、寺門静軒著『江戸繁昌記』（天保三〜七年刊）などであろう。

地方のものでは、赤松宗旦著『利根川図志』（安政五年（一八五八）刊）や、鈴木牧之著『北越雪譜』（天保七〜十三年刊）などが注目される。いずれも単なる地理的説明の枠組みを超えて、それぞれ利根川沿岸、雪国の生活感情を伝える含蓄深い内容となっている。

また、岡山鳥著『江戸名所花暦』（文政十年刊）など、名所紹介が歳時意識と繋がっていくことにも注意したい。そこではゆかりの和歌や俳諧が添えられていることも多い。いわば、四季折々の風物を楽しもうとする生活感情と文芸の鑑賞が一体となっているのである。

- (1) 新編日本古典文学全集『近世俳句俳文集』（小学館、二〇〇一年）の雲英末雄氏の解説を参考にした。また、横沢三郎『俳諧の研究―芭蕉を中心に』（角川書店、一九六七年）中の「俳文の特質」も参考とした。
- (2) 堀切実『俳文史研究序説』早稲田大学出版部、一九九〇年
- (3) 揖斐高『蕪村集 一茶集』ほるぷ出版、一九八六年、一四七～一四八頁。
- (4) 注(2) 堀切書九一～九二頁。
- (5) 濱田義一郎『江戸文藝攷』岩波書店、一九八八年、二二〇～二三二頁「『狂文』覚え書」。その淵源は、享保末から宝暦、明和頃にかけての漢文体もしくは漢文調の狂文の流行にあるとされる（中野三敏『戯作研究』中央公論社、一九八一年、二六二～二八一頁「狂文論」）。
- (6) 白石良夫・法月敏彦・渡辺憲司『江戸のノンフィクション』東書選書、一九九三年、一〇〇～一〇二頁。
- (7) 板坂耀子『江戸の紀行文』中公新書、二〇一一年、「はじめに」。
- (8) 注(7) 板坂書一〇三～一〇四頁。
- (9) 菱岡憲司『小津久足の文事』ぺりかん社、二〇一六年、二四七頁。なお、『陸奥日記』は、東北文化資料叢書第十一集（東北大学大学院文学研究科東北文化研究室）に翻刻が備わる。

【付記】近世の文章としては和文・漢文に触れるべきだが、これについては、『日本「文」学史』第三卷（勉誠出版、近刊）において「近世の散文」として論じたので、本稿では割愛した。
 考証随筆と地誌の本文の用例も紙数の関係上、割愛した。